

心よとわに美し

米田栄作・詩とヒロシマ

◇ 1 ◇

被爆地の思いをこめた合唱「川よ とわに美しく」(三枝成章作曲)は、昭和五十六年初演以来、毎年どこかで歌われてきた。この詩を書いた広島詩壇の最長老、米田栄作(本名・栄、広島市南区翠五千目)は、この六月十五日で八十歳になった。大正末から詩を書いてきた米田が、原爆でどう変わり、どうヒロシマを表現しようとしてきたか、その軌跡をたどることは、戦前・戦後の広島詩壇の一つの歴史をたどることでもある。

感じさせない年齢

「中国詩壇」運者である広島文教女子大の杉本啓生教授は、ことし刊行された「広島県詩集第17集」の中の米田の詩「碧落抄(へきらくしよ)」に、年齢を感じさせぬものを認め取り驚いた。



「黒猫」シヨウ



記念出版の「黒猫」の出版記念会に顔を合わせた大木惇夫さんと米田栄作さん(昭和41年)

ミタイ アア 鳩ニナリタ
イ
燃えるような怒り

この詩の中に杉本啓生は、燃えたるマゲマのようなものを感じた。「単なる鎮魂歌でない、人間自体の持っている燃えるような怒りがある」。そして、アポリネールや古賀春江(画家・詩人、明治二十八年(昭和八年)といつたシュールレアリスム(超現実主義)に触れた戦前の米田の経歴に注目する。シュールレアリスムの影射で言葉解体、黒猫を描いた雑誌で、中の叙し、文明苦を通情詩にもびつくりした」と、

活動拠点の一つに
そのつた活発な詩活動の拠
点の一つに広島も数えられ
た。広島市中区天満町出身の
詩人、大木惇夫(明治二十八年
昭和五十二年)は、震災後
に郷里・広島に帰り、翌十三
年、個人詩誌「黒猫」を発
刊した。「真つ黄色な表紙に
黒猫を描いた雑誌で、中の叙
情詩にもびつくりした」と、

大正十三年三月には早くも友人と詩誌「南方詩人」を出している。そして十月には、山本春二、藤井正志、煙田(たばた)正一らと詩誌「序曲」を刊行した。これは、大正十四年(昭和四年)が生まれ、北原白秋の絶賛を浴びるのである。九月一日、

大木は再上京により「黒猫」は二度で廃刊になるが、(たばた)正一らと詩誌「序曲」を刊行した。これは、大正十四年(昭和四年)が生まれ、北原白秋の絶賛を浴びるのである。九月一日、

大木は再上京により「黒猫」は二度で廃刊になるが、(たばた)正一らと詩誌「序曲」を刊行した。これは、大正十四年(昭和四年)が生まれ、北原白秋の絶賛を浴びるのである。九月一日、

大木は再上京により「黒猫」は二度で廃刊になるが、(たばた)正一らと詩誌「序曲」を刊行した。これは、大正十四年(昭和四年)が生まれ、北原白秋の絶賛を浴びるのである。九月一日、

大木は再上京により「黒猫」は二度で廃刊になるが、(たばた)正一らと詩誌「序曲」を刊行した。これは、大正十四年(昭和四年)が生まれ、北原白秋の絶賛を浴びるのである。九月一日、

詩壇活性化の発端

「序曲」刊行し叙情に対抗

「灼(や)け残った原爆下
ームで、なせ八時十五分に鐘
が鳴らないのだろう／それゆ
え、深夜、雀ら啼(な)きや
ます／空洞は満千の繰り返し」
／(略) 哲郎イマスカ、マダ
米マセンカ」一哲郎とは、二
歳で爆死した米田の三男。詩
はさらに、第一次大戦で被弾
した頭の傷がもつて一九一八

年に亡くなったフランスの詩／類死の血を流す／無蓋(む
人キョム・アポリネールの(こ)の人びとほど／多量の血
を流し、多数殺される／死に
絶えるとき、身も心も溜(た)り
ら／アア ソレタケノ水ヲ飲
方(かた)に刺激を与え、各地に詩の

「黒猫」の発行は、広島の
若し詩人たちに衝撃を与え、
昭和の初めにかけて広島詩壇
を活性化させるきっかけとなっ
たのである。

明治四十一年生まれの米田
は、広島市南区比治山本町の
建材店の長男で、大正十年、
旧制広島市立商業学校に入学
以来、とりつかれたように日
島省吾、日暮介之介、百田宗
治、灰原朔太郎、室生麗星ら
の一人となった。

(文中敬称略)

山よとわに羨しく

米田栄作・詩とヒロシマ

◇ 3 ◇

山路のアトリエ

「永い間、忘
当時の新聞の文芸欄は、若

前衛志す芸術家集う

絵や詩の話にぎやかに



立体造形詩を自指し米田さんらが出した詩誌「萬國旗」創刊号(昭和四年)

めいた増田潤一(昭和十四年、三十四歳で死去)の散文詩「映像の変化」などが収録されている。

米田の詩「煙突・天使・波紋其他」は、大正十五年の「東洋鬼」に載せた詩から、一つの飛躍を見ている。

「帽子を被ってあるヒモジイ孤独。僕は軍艦の煙突の上で蛙の胃腸を考へた。転落を欲しがる青空が指折り数へてゐる、僕の肋骨を、アイツだつてサ・鼻のない顔を見ながら暗れてゐる」一難解さを増しているが、イメージは深まりと多重性を見せている。

「時期近くには、『外観』一・二号の現物は、大正末から昭和初めまで続いた山路と米田の交遊は、米田が意識的に遠ざかりだしたことで、昭和五年ごろから疎遠になった。家業の建材店の仕事もあった。そして「いつまでもワイワイ騒いでいても仕方ない」との思いもあったという。

「『岸麗子』へ贈る連詩を次々発表した。「山路の意中の人・麗子とほだれか」。

「『岸麗子』へ贈る連詩を次々発表した。「山路の意中の人・麗子とほだれか」。

「『岸麗子』へ贈る連詩を次々発表した。「山路の意中の人・麗子とほだれか」。

「『岸麗子』へ贈る連詩を次々発表した。「山路の意中の人・麗子とほだれか」。

日新聞(呉市立中央図書館蔵)には「外観第二号を見る」と題した山路の文が載っている。「二点の帯りもないほがらかな感じである」と評し「彼等は机上の物語を書かない。月夜青白いセンチメントな風景にも感じない。唯々第四延長へ第四延長へ、やがては超現実主義へ」と書いている。

「詩は近
代建築だ」

「朝のぞくと、いつもだれかがベッドに寝ていた。ベッドが大きいので横に六人ぐらいいんで寝ていることもあった」と、商の弟である山路藍(六心)広島市西区古江西町IIが、子供時代の思い出を語

「朝のぞくと、いつもだれかがベッドに寝ていた。ベッドが大きいので横に六人ぐらいいんで寝ていることもあった」と、商の弟である山路藍(六心)広島市西区古江西町IIが、子供時代の思い出を語

「朝のぞくと、いつもだれかがベッドに寝ていた。ベッドが大きいので横に六人ぐらいいんで寝ていることもあった」と、商の弟である山路藍(六心)広島市西区古江西町IIが、子供時代の思い出を語

「朝のぞくと、いつもだれかがベッドに寝ていた。ベッドが大きいので横に六人ぐらいいんで寝ていることもあった」と、商の弟である山路藍(六心)広島市西区古江西町IIが、子供時代の思い出を語

「朝のぞくと、いつもだれかがベッドに寝ていた。ベッドが大きいので横に六人ぐらいいんで寝ていることもあった」と、商の弟である山路藍(六心)広島市西区古江西町IIが、子供時代の思い出を語

「朝のぞくと、いつもだれかがベッドに寝ていた。ベッドが大きいので横に六人ぐらいいんで寝ていることもあった」と、商の弟である山路藍(六心)広島市西区古江西町IIが、子供時代の思い出を語

「『岸麗子』へ贈る連詩を次々発表した。「山路の意中の人・麗子とほだれか」。

(文中敬称略)

山よとわに美し

米田栄作・詩とロマン

◇4◇

もりで書いた」と米田。

米田の詩にはよく鳩が出てくる。それはおそろしく、空を飛ぶ翼を持った「自由」な心の象徴であろう。その「自由な鳩」はいまも「海のついで」胸のいだきしむるもの、卑屈のみ多き後世に於て、哀れや

詩の本(もと)こそ昏(くら)みける」(「鳩の夜」)という状態であり、その翼は「鍍金(メッキ)」なのである。自らの魂の救いはどこにあるのか。迷いの中の「歎異

次第に明るさ失う
二・二六事件は昭和十一年、日中戦争のぼっ発が十二

暗い鳩の夜

大正末から昭和にかけての、比較的自由な空気を忘れたかのように、時代は軍部ファシズムへと突入して行く。

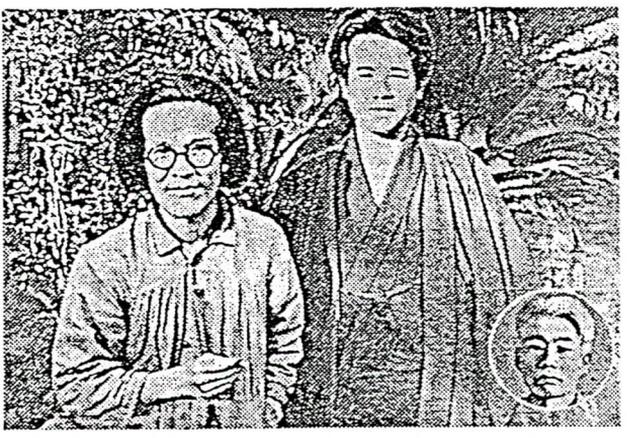
自由奪われ詩に別れ

古典の世界へ救い求める

米田栄作は昭和七年(一九三二)から、百田宗治(明治二十六年(昭和三十年))の主筆する詩誌「椎の木」に作品を発表していた。動きの少ない時期である。そして十二年三月、初めて詩集「鳩の夜」を出して詩筆を折るのである。「鳩の夜」は、古い詩を後のペー

る「へてある」といった詩句も含んでいるが、また明るさを残している。それがだんだん暗くなっていく。

述う心の内を表現
たどれば「静かな時間」の「一節」「諧謔(かいぎやく)は既に無言である」(巻は二巻を自分の「歎異抄」を書くと



「シュール事件」でつかまった山路さんとさかもとさん。円内は田谷さん

対したわけでもない。その勇気が私になかった」

詩人や画家ら逮捕

そのころ比治山のふもとに段原町(現・広島市南区比治山町)の画家山路商を囲むグループには詩人さかもと・ひさし(坂本表、明治四十二年

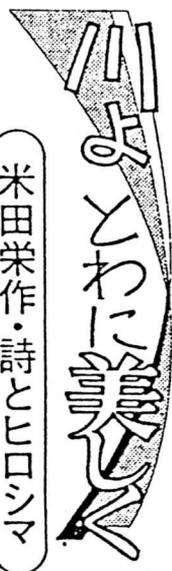
一昭和五十四年)プロレタリア詩を発表する道。もう一つは詩を發表する道。もう一つは地下にもぐって反戦詩を書く道。「私には戦意高揚の詩は書けない」といって戦争に反

図つたとの容疑である。さかもとは刑事から「お前はシュールリアストだ」と言われ「単なる象徴派だ」と答える。刑事はさかもとの指の間

翌十七年六月、三人は釈放されるが、山路だけ再逮捕され二週間遅れの出所になった。拘留の無理がたたった(と)もあって山路は喉頭(こうとう)結核で十九年六月二十六日死去した。

「山路は権力への反抗が強く、夜中でも「戦争反対」と路上で叫んでいた」と米田は言う。山路の絵に松の根を描いた大作「松」があった。釈放後の山路が「松の根」(てきしめられたよ)と語っている。その絵が革命的意義を表現している」と刑事に追及された。

「金網を張った小さな窓から鳩の飛翔(とび)をさまはる。田への限らない渴望(けいぼう)だ」といって詩を書いた。(文中敬称略)



米田栄作・詩とヒロシマ

◇5◇

「その子の名は哲郎／＼」 (現・中区十日市町) だった／原爆の焼ケ野原を／三男哲郎は、母方の祖母と幾日も幾日も／一カ月も／二ともに爆死した。遺骨も遺品もカ月も／私は探し歩いたが／その子の骨／見え見つけ出すことができなかった」 (「釈道遺子」)

原爆で失った子

昭和三十二年八月六日、米田栄作は、強制建物疎開により移転してきたばかりの広島市段原新町(現・南区)にいた。比治山の東側で、原爆投下地点から遙か山裏に当たった。朝食中だった。真っ白い光が走った。食卓に置かれていた弁当がボーンとどび、壁が崩れた。ガラス片で右足首にけがをした。壁に掛けた襦袢の片で引き寄せられた。爆心地から六百メートルの左官町

食事中、白い光線

遺骨・遺品さえなく 悔恨バネに詩作へ意欲

日、阿久根台風と、二つの台

風が広島島の廃墟を襲った。暴風雨の音の中で米田は、中断していた詩筆を再び執った。十八年や、現在広島市で詩

「悔恨」という言葉の繰り返に注目したい。その年九月十七日、枕崎台風、十月十年にかけて刊行された詩誌

「悔恨」という言葉の繰り返に注目したい。その年九月十七日、枕崎台風、十月十年にかけて刊行された詩誌

「悔恨」という言葉の繰り返に注目したい。その年九月十七日、枕崎台風、十月十年にかけて刊行された詩誌

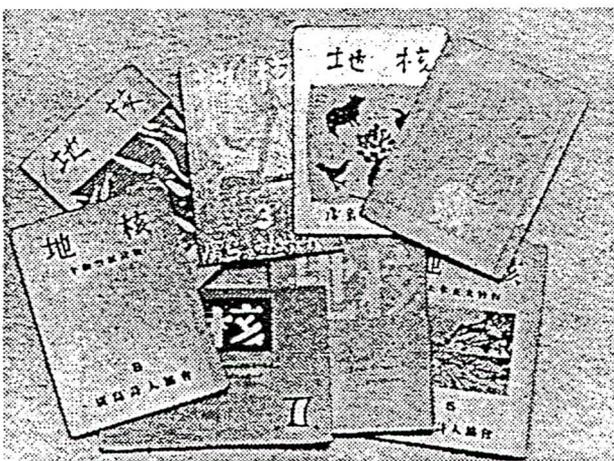
「再び すばやく美しく性(よみがえ)ったもの／それは三角洲をつらぬく川だった／目を凝(お)めて 水脈は色濃(く)く(さ)えきた／その色のなかで 私の重子は随分大きくなつた／うう／(「川よ、とほに美しく」)

詩誌に次々と発表

広島島の廃墟で生まれた米田返に注目したい。その年九月十七日、枕崎台風、十月十年にかけて刊行された詩誌

生誕するともかぎらない。(みま)かりしものうらうつらまた生まれてきてほしいのではなかるつか。これはまさに「広島」であつてこそ出来得る仕事であつて、それだけのの黎明」は「山の端になつた

先駆的な作詩活動 「あのころは、まだ原爆の詩を書くとかの雰囲気ではなかつた。とにかく詩を言つていつてだつたと米田



米田さんが峠三吉らと刊行した詩誌「地核」

その中で米田が「家族」(「地核」二号)、「川よ、とほに美しく」(三号)、「星の歌」「復帰の地」(四号)、「鄙(ひな)歌」(六号)、「川の鎮魂歌」(八号)と、継続してヒロシマを表現したことは、作家大田洋子や詩人原氏喜らと並ぶ先駆的な動きといえるのである。

野望は持っているのではなから、狭穉の中に夜が選りろつか」というのである。創朝がしたる」といった、極刊号に米田は「現幻」という詩を載せた。「夕雲のしづかなるそのた核」では原爆詩を書いていな

(文中敬称略)

川よとわに美し

米田栄作・詩とヒロシマ

◇6◇

詩人の社会性強調

詩集「地核」三号(昭和二十三年十月)に、米田栄作が詩論ともいへべきものを書いている。「詩に於ても平俗、平易(低俗、安易を意味しない)の表現を取り入れるるといふことも思慮されてみる必要があらう。今日、詩人は社会や現実から切り離しては考へられない存在である」と、詩人の社会性を強調している。その米田が二十六年四月、詩集「川よ とわに美しく」(広島・新文明社刊)を出す。詩と短歌を集めた栗原貞子の「黒い卵」(二十一年刊)はあったが、ヒロシマをテーマにした純粋な詩集としては初の刊

行だった。翌年九月には増補版「川よ とわに美しく」(東京・第二書房刊)として中央から刊行している。米田はこの詩集で「地核」八号(二十四年八月)に故世た「川の銀魂歌」の五行分を削除した。そこには「水に天をつつせ地をつつせ」ながれに石をかへせ木をかへせ」という詩句があった。後の藤三吉の「原爆詩集」の何片序序ちをかえせ ははをかえせ」に影響した。増補版「川よ とわに美しく」の指摘もある詩句である。占領軍検閲に抵抗

広がる反核の輪

被爆地へ強まる関心

「第五福竜丸」で一気に

への勉強のためといへるであらう」と述べている。この詩集がうれしかった、と米田は言う。ナマの感情を詩表現へと昇華した努力を星屋がみていたのである。暗い20年代の後半、この詩集について、後に米田は、呉市にいた評論家荻原肆夫(故人)から「美しい」という言葉を口にするには大変な勇気がいったな」と言われ、キクリとした。ふつうなら詩で「美しい」という抗でもある。沖繩の反基地闘争で「やさしい心を武器にして」という歌が歌われていることを、昨年新聞で知った米田は「自分の気持ちと同じだ」と思った。「やさしい」は「美しい」と同じである。自身の気持ちを表現すれば「美しい川の心を盾として」となるという。「美しく」あることが、戦争への「抵抗」になるというのである。それは外部の暗い力への抵抗であり、戦時中言われ、キクリとした。ふつうなら詩で「美しい」という抗でもある。



詩人小野十三郎氏(矢印)を迎えた広島の詩人たち(昭和31年)

言葉を使うことは極力避けられ、そんな言葉を使わずに「美しい」と思わせるのが表裏である。それを承知で米田は詩に「川よ とわに美しく」とつけたのである。しかし、二十年代後半の動一気に反核運動の輪が広がる詩が故つた。り、人々の目は被爆地に向けられた。岡山市の詩誌「黄蘗」もそのまゝたゞよはせし、(略)廃墟はまだ冷えてい八月)には、永瀬清子の「廃ない／かろはくたいてその墟はまだ冷えていない」とい

ぶとも／なだめんと河水は七色にやち／め／をとも」三十二年三月八日に開かれた「原民喜・藤三吉記念現代詩講演会」で講師として来広した小野十三郎も書いた。「原子力、それはなおこではいず／よ／りかきたり／人間の生命の深部を無惨に犯す／眼に見えない、緩漫な／しかも致命的な恐るべき光の熱源だ／(略)おまえの眼の注がれている方向を見て／はじめてハッキリと／見えるものがある」(「原爆十周年に」) この詩は米田が中心になって編集発行したアンソロジー「詩集広島」(三十四年八月、季節社刊)に収録された。同詩集には、安東次男、吉塚勤治、木下夕爾、貞壁仁、並井繁治、山本太郎らの作品もある。(文中敬称略)

川よとわに羨

米田栄作・詩とヒロシマ

◇7◇

「川」を歌い続けていた米田栄作の目が「砂」に向いた時がある。ヒキニ水爆実験による死の灰被災が起きた二十九年以降のことである。その砂はひとつひとつが「灼(や)けている」砂である。「灼(や)けている」砂である。マクロや雨の放射能汚染が問題となり、核爆弾が身近に迫っているを感じた時、米田の怒りが「灼ける砂」として表現されたのだらう。

「ひとつぶ、ひとつぶの砂が死者の眼だろうか」どの砂にも、同じ訴えの叫びを三もらせ、どの砂にも、同じ祈りと願いの言葉を打ちよめ、鐘の鳴りひびくとき、どの砂も、炎熱の空をみつめ、不毛の地に揺られていくものを、夢みるだろうか。この「八」は状況の詩はよう書か

未来にまで歌

反核の心情ふつつ

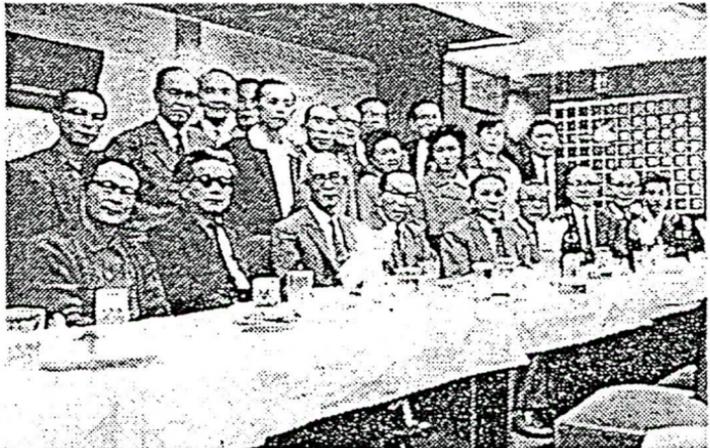
続く実験へ強い危機感

「未来にまで歌」の「未来にまで」と米田は言がなほった後であらう。／傷集と少し違った感じを持つ。何時なるか判らない。／或いは未来までも治らないだとする米田だが、この詩集では「状況」も顔をのぞかせる。孤独の色強め休筆

巻頭を扉星が飾る

た詩人が遠くにいたこと、ヒロシマは記憶していてもい

「未来にまで歌」の巻頭を詩人室生麗星の「著者目「八月六日の奏鳴」(季節)「あふれて、もえる緑に」少女達の頃に十年もなほらな



詩集「八月六日の奏鳴」の出版記念会。前列左から3人目が米田さん(昭和36年)

「こりかえしてきた十五年間／人間は蟬よりもかなしく／つきつぎに鐘を鳴らすとき／おまえの胸によみがえり／はばたくものは何か／砂ぼこりの道ばかり遠く／つきつぎに死者の影がうつらなり」

「記念樹の道」これは「美しい川の心」の失望の歌ではなからうか。こつて米田は、戦前に筆を折ったように、三十六年以降、また長い休筆に入る。米田自身は、経営する会社の「運営に全力傾注」したため

「運営に全力傾注」したため特作の空白期が生じたと説明する。だが、精神的な落ち込みがあったのも間違いないだらう。八月六日の

(文中敬称略)

川よとわに美し

米田栄作・詩とヒロシマ

◇ 8 ◇

「ぼくの詩活動は聞けつ泉
 のようだから」と米田栄作
 は言う。戦時中の沈黙と、昭
 和三十六年からの二十年間に
 わたる真作な空白期があった
 ことを指している。米田は五
 十七年初頭、建材会社の運営
 から退き、その秋、失明の危
 険のあった隼閃障の手術をし
 た。「これが私の第二の詩作
 開眼」と米田。第一の開眼と
 は廃虚の広島で「川よ」とわ
 に美しく」を書き始めた時
 だ。

「延長上
 の詩を作る意
 欲を覚えた。一連の詩「碧落
 抄(へきらくしよ)」「の誕
 生である。」

鎮魂通し平和を訴え

言葉一つにも祈り込め

詩人や画家を歌う

第二の開眼は、百斤近い詩

「鬼のいろい」で始まっ
 た。戦前、広島市段原町(現
 ・南区比治山町)にあった画

「広島の博落は高階を一步
 づつ下りる」三十九段目のノ
 シラブルが一休止する時ノ碧
 落は色褪せ身萎つ(略)ゴ
 リタマジャクシの一群れがノ
 白い花を軋(くわ)えて離
 ないノ(こどもの眼珠だった
 か)」「(広島ペンクラブ機関
 誌「ペン」1984)

「符」に見立てた。「こども」
 とは、爆死した米田の三男哲
 郎(当時三)である。「鎮
 魂を通して平和への心根を訴
 えよう、という詩が大半にな
 った」と自らの詩について言

「死者」とくが蘇るま
 て、尾上和彦や三枝成章とい
 う。昭和四十二年に広島県
 詩人協会の座談会「広島
 の川をめぐって」に参加したこ
 ろである。栗原貞子、大原三八
 子、杉本春生らが同席した。
 「とわ(永遠)」という言葉
 が瞳を拭いたノ紺が瞳に滲み
 透ったそのノ一瞬、爆シカレ
 を使つたに勇氣がいった、と
 碎カレ、千々二散ツタノ爾来
 四十年、骨片は帰らず」
 (「ペン」1986)

「死を」とくが蘇るま
 て、尾上和彦や三枝成章とい
 う。昭和四十二年に広島県
 詩人協会の座談会「広島
 の川をめぐって」に参加したこ
 ろである。栗原貞子、大原三八
 子、杉本春生らが同席した。
 「とわ(永遠)」という言葉
 が瞳を拭いたノ紺が瞳に滲み
 透ったそのノ一瞬、爆シカレ
 を使つたに勇氣がいった、と
 碎カレ、千々二散ツタノ爾来
 四十年、骨片は帰らず」
 (「ペン」1986)

「死を」とくが蘇るま
 て、尾上和彦や三枝成章とい
 う。昭和四十二年に広島県
 詩人協会の座談会「広島
 の川をめぐって」に参加したこ
 ろである。栗原貞子、大原三八
 子、杉本春生らが同席した。
 「とわ(永遠)」という言葉
 が瞳を拭いたノ紺が瞳に滲み
 透ったそのノ一瞬、爆シカレ
 を使つたに勇氣がいった、と
 碎カレ、千々二散ツタノ爾来
 四十年、骨片は帰らず」
 (「ペン」1986)

「死を」とくが蘇るま
 て、尾上和彦や三枝成章とい
 う。昭和四十二年に広島県
 詩人協会の座談会「広島
 の川をめぐって」に参加したこ
 ろである。栗原貞子、大原三八
 子、杉本春生らが同席した。
 「とわ(永遠)」という言葉
 が瞳を拭いたノ紺が瞳に滲み
 透ったそのノ一瞬、爆シカレ
 を使つたに勇氣がいった、と
 碎カレ、千々二散ツタノ爾来
 四十年、骨片は帰らず」
 (「ペン」1986)

「死を」とくが蘇るま
 て、尾上和彦や三枝成章とい
 う。昭和四十二年に広島県
 詩人協会の座談会「広島
 の川をめぐって」に参加したこ
 ろである。栗原貞子、大原三八
 子、杉本春生らが同席した。
 「とわ(永遠)」という言葉
 が瞳を拭いたノ紺が瞳に滲み
 透ったそのノ一瞬、爆シカレ
 を使つたに勇氣がいった、と
 碎カレ、千々二散ツタノ爾来
 四十年、骨片は帰らず」
 (「ペン」1986)



「広島川の川をめぐって」の座談会での米田さん
 (左から2人目) 一昭和42年

「この町の犬と川とがノま
 つ青くなつてきたのはノその
 子(哲郎のこと)やノその子
 のような天使たちがノたぐさ
 ん たぐさいるからだろ
 う」(「碧落遺稿」)
 米田はヒロシマの川にまん
 だら(豊隆)ノ故仏・ぼさつ
 などとを網羅して描いた悟りの
 世界の図)を求む合わせて見
 る。かつて古代人がまんたら
 刺しゅうを一针ずつ祈りを込
 めて作つたように、米田の詩
 作は、あの日の死者たちを
 デルタのまんたらに母念に、
 した深沢忠孝(昭和九年生ま
 れ)がその人、六十年に雑誌
 にみえる、八十歳になつても
 針の手を放さずとしなないで
 再評価する動きも
 米田の詩を再評価する動き
 は詩人の中にも最近出てき
 た。東京都国分寺市で詩誌「
 文」を創刊した「ヒューマニ
 ズム」とり
 (文中敬称略)
 〓おわり〓